

『計量国語学』アーカイブ

ID	KK290602
種別	追悼
タイトル	計算機屋から見た水谷さん
Title	Tribute
著者	和田 英一
Author	WADA Eiiti
掲載号	29巻6号
発行日	2014年9月20日
開始ページ	170
終了ページ	171
著作権者	計量国語学会

計算機屋から見た水谷さん

III 技術研究所 和田英一

一ツ橋の国語研究所で水谷さんと初めて会ったのは私がまだ学部生の時だから 60 年前だ。話が弾んでつい長居した。その後「計量国語学会を作るから手伝え」とのご沙汰。門外漢なのに最初から委員になった。

何期か委員を続け、一旦止めた後、また何期か委員会に連なり、最後は監事ということで学会に奉仕した。また大会にもよく出席したが、委員会や大会の折に水谷さんと話の出来るのが楽しかったからであろう。

水谷さんからは著書もずいぶん頂いた。私が普段読むようなものとはかなり違うが、国語学者の目の付けどころがどういうものか理解できた。他の国語学者のを見たことはないが、水谷さんの説得力は大きかったのではないかと。ただ、あの数式や線表の多い記述は私にも閉口で、ほとんどフォローしていない。

ところであのようにな数式様の記述が好きなら、プログラム言語に取り付かれるのはまあ自然なことで、手書きの「1981 年度 LISP1.9 教材」を頂いたときは、データに日本語（その頃は半角かなだけ）があれば、LISP は日本語文の生成にも十分使えると納得した。水谷さんの教材が日本文学科の学生さんに理解できたかは疑問だが。

暫くして、今度は「国語風次第立て言語 朱唇の手引」が届く。1989 年刊。これには水谷さんの趣味が横溢しており、LISP1.9 に比べて読むのが大変であった。そもそも「プログラム」は岩波国語辞典にもある語なので、次第立て、次第書きと開きなおらなくてもよさそうだ。演算が逆ポーランド記法なのは、日本語の語順を意識したと思われる。ループはめぐり、再帰は頭山、配列は陣立て、エラーは事故などということで、コンパイラを翻訳系、インタプリタを解釈系という私さえ、朱唇からは帝国陸軍の用語を思わず連想してしまった。あの強烈な用語でこの処理系は普及に損をしたのではないかと。

水谷さんは朱唇では趣味に徹しても、岩波国語辞典での語釈は常識的かつ正確で、ハッカー、リスト構造、木構造など計算機まわりの語釈に私はまったく賛成だ。

水谷さんの話を聞くのが好きな私は、プログラミング・シンポジウムや情報処理学会の大会で講演をお願いした。1986 年のシンポジウムの招待講演では「川柳が来て計算機弱るなり」という題で、江戸川柳の面白さを話して下さった。2010 年の「私の詩と真実」

では、「捧ほど願って」として情報処理の経験を披露された。学会誌 2010 年 5 月号 574 ページにそのときの写真がある。

会話で：

私「先日中山道の読書というところ通りました」

H₂O「あの辺の 3 つの集落を 1 つにした時、それぞれの名前をとってよ。み。かきにしたのだ」

私「なんでも知っているのですね」

メールで：

私「道芝」にお書きになった伊勢物語の「勢語私解」の読み方ですが、

H₂O「せいごしかい」です。契沖の「勢語臆斷」が「せいごおくだん」と呼ばれますが、おほけなくもこの書名に倣ひました。

ありがとうございました。